

『中日大辞典』と私

わが国初の本格的中国語辞典である愛知大学の『中日大辞典』。出版されて三十五年の間に二度の改訂を行い、発行部数も十万部を超え、広く活用されている。この辞典の編纂に半世紀近く携わってこられた今泉先生に、出版までの経緯やその後の改訂作業、さらには今後の展望についておうかがいする。

今泉潤太郎

〔中日大辞典〕
前編集委員長

インタビュー

安部 悟

〔愛知大学現代中
国学部助教授〕

■『中日大辞典』出版前史

安部 本日は、愛知大学をこの三月に退官された、『中日大辞典』の前編集委員長である今泉潤太郎先生に、辞典出版にまつわるさまざまなエピソードやその歴史について伺いたいと思います。今泉先生は本学の卒業生でいらっしやっつて、卒業と同時に現在の中日大辞典編纂所、その頃は華日辞典編纂処と言ったと思う

のですが、そこに勤務され、その後四〇年以上も編集業務に直接たずさわってこられました。まさに『中日大辞典』とともにも歩んでこられたわけで、そこでの体験など貴重なお話をお伺いできればと思っております。それではまず今泉先生から、この『中日大辞典』が出版されるまでの経緯といえますか、もともとは東亜同文書院の時代からすでに編集作業が開始されていたようですが、その頃からその歴史を簡単に説明いただければと思

います。よろしくお願いたします。今泉 この辞典は今のお話のように東亜同文書院時代から作業が行われていました。同文書院は昭和一四年以降大学になるので、その後愛知大学に來られ、『中日大辞典』の編者となられる鈴木樺郎先生が書かれた「編者のことば」によりまして、三三年頃この編集を發起したとありますから、昭和八年からということになりますね。

当時、東亜同文書院には支那研究部と
いうのが全学唯一の研究所としてありま
した。これは大正七、八年頃にできた大
学の研究部門で、後に東亜研究部とい
う名前に変わります。支那研究部は、い
ゆる中国のエリアスタディー、地域研究
としての中国について研究業績を發表す
るわけですが、この中に華語研究部とい
うのが設けられました。華語研究部は昭
和三年から、『華語月刊』という月刊の研
究誌を刊行していました。これも研究ス
タッフが充実していたということだと思
います。当時、現代漢語の研究雑誌は日
本にも一、二ありましたが、『華語月刊』
は上海の内山書店を通して、東京の文求
堂や大阪、それから京都の書店で店頭販
売したり、各大学、高等専門学校の中国
語の先生が購入していました。これにつ
いては私も書いたことがあります。このよ
うな活動が昭和三年頃から行われおりま
すので、「編者のことば」の中で事業の発
起は一九三三年とされているわけですが、
もう少し早い時期から始まっていた

のかなとも考えられます。

結局これが敗戦時には、十数万枚の
カードとして残るわけですが、これを華
日辞典カードと言っていました。昭和一
六年には太平洋戦争が始まりますが、そ
れ以前の昭和二年七月には盧溝橋事件
が起きて、八月には上海に飛び火し、い
ゆる第二次上海事変が起きます。この
時に同文書院は放火もあり、校舎が焼け
てしまうのですが、原稿カードの多くは
焼け残り、それらを基に敗戦時までに十
数万枚のカードが作成され、それらは敗
戦と同時に中華民国政府に接収されま
した。

その後、東亜同文書院大学を前身とす
る愛知大学が昭和二一年に豊橋の地に発
足したのですが、学長を含め東亜同文書
院関係者が創立のメンバーとなっていま
した。東亜同文書院大学の学長であつた
本間喜一先生は、原稿カードがもし残つ
ていたら、愛知大学の手で完成させて、
日中友好のために役立てたいという考え
を、鈴木先生や本間先生の後に学長にな
る小岩井浄先生に相談されました。

民国政府が接収した時に鄭振鐸という
学者が教育部の接収委員として同文書院
の図書等、主に學術資料の接収にあたつ
ていました。鄭氏は中華人民共和国政府
成立後、教育部の副大臣になった方です。
鈴木先生は接収時に、鄭氏に口頭で将来
機会があつたら是非我々日本人の手でこ
の辞典を出したいという希望を申し述べ
られたということでした。それを思い出
して、本間先生の要請をうけ、新中国成
立直後の一九五〇年頃に、この希望を書
いて鄭氏に手紙を出そうということにな
ったのですが、当時は日中間の国交が
回復されていなかったので手紙を出す方
法がないのですね。そこで、本間先生も
創立発起人の一人となつていた日本中国
友好協会が日本側の窓口のような役割り
をしていましたので、ここに頼んで手紙
を渡してもらおうということになりました。
た。

当時、日中間の文化交流は、日本中国
友好協会の島田政雄理事と中国側の康大
川氏の二人が担当されていたのですが、
後になって私はこのお二人に手紙をさし

上げてこの間の状況を確認したことがありません。結局その手紙が五〇年末か五一年頃に中国側に渡り、五一年から五二年頃には中国側で愛知大学側の申し入れが受け留められ、カードを探してみようということになったということです。

日本の敗戦後、中国は国共内戦に入りますが、この原稿カードを含む同文書院の資料は上海から国民政府の首都であった南京に送られました。国民政府はその後台湾に移りますけれど、胡適という著名な学者がたまたま当時の南京図書館の館長を兼ねていたためか、南京図書館に保管していました。それを共産党側が接収したのです。愛知大学からの申し入れを受けた中国側は、現在南京に保管されているが、敗戦によって日本の全ての財産を接収したということだから、これを返還することはできない。法的にできないということなのでしょうね。政治的にも当然そうだと思います。しかし、日中友好の見地に立って中国人民から日本人に贈呈しようという内容の手紙が日本中国友好協会の理事長である内山完

造氏のところにもたらされ、内山氏から愛知大学の本間学長に伝えられました。

戦後、旧華語研究部の主要メンバーは愛知大学のほかに、一橋大学、神戸大学、東北大学など、各大学で中国語の教員をしていました。愛知大学には鈴木擇郎、金丸一夫、木田彌三旺の数名ですね。木田先生は教員ではなく、理事としておられた方です。そこで旧華語研究部のメンバーにお集りいただき、日本中国友好協会から返還された原稿カードをいかに完成するかについて相談することになりました



今泉潤太郎 [Imaizumi Juntaro]

した。そしてこの原稿カードが返された一九五四年末に、愛知大学で関係者の会議を開いたのです。旧華語研究部のメンバーは東亜同文書院の中国語教員だったわけですが、その中心的メンバーはほとんど参加されたようです。そして会議の結果、愛知大学が一番完成に対して具体的な力をもつていて、熱意もあるし、旧関係者も多いということで全会一致してこの事業を愛知大学に任せようという決定になったわけです。そして昭和三〇年に愛知大学華日辞典編纂処が発足しました。ちょうどその年の三月に私は愛知大学文学部文学科を卒業し、できたばかりの辞典編纂処に入りました。

実はこの会議はかなり重要な意味がありました。というのはお集まりいただいた東亜同文書院のメンバーの中に、一橋大学の熊野正平先生がおられまして、愛知大学の『中日大辞典』刊行後のことです。三省堂から『熊野中国語辞典』を出版されたんです。愛知大学の『中日大辞典』と同文書院の華日辞典原稿カードの関係をめぐる、同文書院同窓会であ

る滬友会の機関誌『滬友』上で議論があり、その後いろいろな尾を引きましたが、会議の議事録が残されており、事實は明白です。

■辞典編纂処と辞典刊行会

安部 『中日大辞典』出版の前史とでもい
いましょうか、東亜同文書院との関係や、
華語研究部と華語辞典カードの存在、さ
らには多くの方のご助力で戦後原稿カー
ドが返還されたことなど、実に興味深い
お話でしたが、先ほどの話の中でお名前
がでてきました、当時接収委員をしてお
られた鄭振鐸先生。この方著名な文学史
家であり、「文学研究会」の結成メンバー
となるような作家でもあると思うのです
が、そういう方の協力もあつたわけです
ね。また、そこで日本中国友好協会が果
たした役割は大きかったと思うのです
が、かつて魯迅とも親交のあつた内山完
造友好協合理事長が、当時中国科学学院
長であつた郭沫若先生にもお願いをされ
たと聞いたことがあるのですが……。

今泉 その通りです。郭沫若先生は非常
に日本人にとつても著名な方で、当時、
中華人民共和国が組織した中国科学学院の
院長をされていました。現在は中国科学
院と中国社会科学院と二つあり、中国科
学院はサイエンスの方ですが、当時
は中国科学院が全ての学問研究の大本山
だったのですね。この方と内山完造氏は
個人的なつながりもありましたので、そ
れでこのお二方に向けて原稿カードの返
還を依頼しました。

結果的に原稿カードが戻ってしまし
て、いよいよ大学での編纂ということに
なります。中日大辞典の内容に入る前に
経過をもう一言だけ付け加えておきたい
のですが、本間先生という方は単に辞典
を編集することだけを考えたのではな
く、辞典の出版を、編集から刊行に至る
までの一セットのものであると考えて、
どういうことが必要とされるか、とりわ
け財政的な問題に関しては本当に的確に
把握していました。

当時、辞典編纂を大学が行うという例
は希有でした。しかも、辞典には膨大な

資金と人と時間を要します。愛知大学は
昭和二年に創設されたので、三〇年は
創立からちょうど一〇年目にあたり、大
学の一〇周年の記念事業の一つとして辞
書編纂が取り上げられたのです。しかし、
お金の面では非常に厳しい注文を評議会
からつけられました。現在とは異なり大
学の法人運営は全て評議会が行っていま
したので、この評議会から、学内に辞典
編纂処を設け、それに人員を配置して編
集を行う点は賛成するが、具体的な編集
にかかる費用は切り詰めてやるようにと
いうことと、出版については確約できな
い、改めて議論するという注文がつきま
した。

本間先生はそのことも想定され、華日
辞典刊行会という組織を華日辞典編纂処
の発足と同時につくりました。この組織
は簡単に言うと、日中文化交流のために
華日辞典を刊行する、そのために学外か
ら財政的な援助をしていたただこうとい
うもので、当時日本における中国関係の著
名な方々や旧同文書院の方々を顧問や評
議員として、学外に開かれた組織として

立ち上げたのです。これが後に、具体的に印刷費がどれくらいかかるという時に、資金の大半を刊行会が大学外から募金して、その実績の元に大学が足りない印刷費を出す形で刊行をブッシュするわけですね。こういう点では、実際の編集業務は鈴木先生ですが、出版に関してそれを支えたのは本間先生と違っていいと思います。なおかつ刊行会は持続されて、中国との学術交流の基金会の役割を果たすに至っています。

ご存知の通り大東文化大学によって『中国語大辞典』が出版されました。中国語学会の香坂先生が大東文化大学の教授になられ、後には学長になられますよね。『中国語大辞典』は今でも我々がその恩恵を被っている上下二冊の堂々たる辞典ですね。今までもなかったし、これからもたぶん日本では出ないぐらいの辞書です。ただ、絶版同様ですよ。あの辞典を再版するとなったら何億というお金がかかるわけですから。これを見て、辞書の出版を大学の一事業として展開することがいかに大変なことであるかがわか

りますし、『中日大辞典』が出版できたのも、やはり本間先生の構想があつたからこそだろうと思います。

鈴木先生はこういうことを私によく言われました。本間先生の強い勧誘があつたけれども、自分としては返還を強く希望するほどではなかった。あの原稿カードはたぶん使えないだろうと思つたからだ。それは我々にはよくわかるでしょう。なぜならカードは一九三〇年代のもので、中国が全く変わつてしまつていますから。昭和一六年から戦争が激しくなりますが、その前から同文書院でも、鈴木先生より一代下の先生方は兵隊で召集されてしまうんですよ。これは木田先生も内山先生もそうおっしゃっていますけど、戦争の激化で、カード作成などできる状態ではないんですよ。ですから、実際に取り組めたのは昭和八年から数年間ぐらいです。その後の中国の変り方は天地をひっくり返すようなものでしょう。従つてこの編集にはたいへんな時間を要するし、また今の愛知大学の中国語スタッフだけでとてもできないから、増員

しなければいけない。さらに、カードは返つてこないだろう、返つてこなくてもいいというお考えでもあつたようですよ。

これが編纂の始まる前史とでもいいましょうか、これについては『愛知大学五十年史・通史編』の第一章第四節に『中日大辞典の編纂』という項目が与えられ、そこにも書いておきましたのでご参照ください。

■『中日大辞典』の編纂に着手

安部 ありがとうございます。これで一九五五年に華日辞典編纂処が生まれる前段階までの歴史についてお伺いしたわけです。これからはいよいよ今の『中日大辞典』のお話になっていくわけですが、もう一度整理いたしますと、一九五五年四月に華日辞典編纂処が組織され、同年の六月に、先ほど今泉先生が強調されたように、本間学長が、先見の明とでも言いますように、みごとな経営手腕を発揮され、編纂処の経済的な支柱とするため

に華日辞典刊行会を設立。この会の存在が、それ以後辞典編纂処が本格的に活動を進めていく中で、非常に大きな役割を果たすことになったわけですね。では、その後の動きにつきまして、時代を追いながらご説明いただければと思います。今泉 これです仕事が始まるわけですが、鈴木先生が委員長で、委員会方式を採りました。メンバーは鈴木先生、内山雅夫先生、今泉、それから桑島信一先生という方がおられました。内山先生は同文書院の教授だった方で、編集主任として新たに招聘され、教養部で中国語を担当しておられました。桑島先生も同文書院の方なのですが、愛知大学の創立時に中国語教員として来られました。愛知大学は創立当初から中国関係のスタッフがそろっていたので、現代中国の地域研究が専門の先生方全員を編集協力委員とし、中国語が専門の先生方を編集委員としました。中国語の先生は金丸先生、池上貞一先生がその当時みえました。愛知大学の中国語スタッフは私までは全員が同文書院関係者でした。



..... 安部 悟 [Abe Satoru]

私は囑託として入って、卒業したばかりで何もわかりませんでしたけれど、いろいろな仕事をやりました。最初の私の仕事は、豊橋校舎内に設けられた編纂処の掃除と整理。それから机をもらってきて、先ほど言った一四万枚のカードを山のように積み上げて、ポポモフォ順に入っていたカードをアルファベット順に並べ替える作業をしました。ボール紙で作業用のカード仕分け装置を作るわけです。これは内山先生の発意だったと思いますけれどね。ポポモフォというのは

注音字母ですよね。当時、中国語は全部注音字母でやっていましたが、あの頃からウェード式はともかく、注音字母はいずれピンインの方に行くだろうという予想がすでにありましたでしょう。中国もその後そうなっていくと思いますが、山のよう積み上げたカードを一枚一枚くつて、別の山に仕分けていく作業です。カードボックスを作るのはその翌々年くらいです。カードボックスはかなり高額なのですよ。お金がなかったものだからね。最初はそんなことからはじめました。

編集委員会の始めの仕事は何かというと、どういう辞書を作るかとか、執筆基準などについて話し合ったり、カードをアルファベット順に分けるといった基礎的な仕事をやるうということを進めました。それから資料集めですね。編集方針、執筆基準の大綱ができあがったのが昭和三〇年から始まって、三二年頃だったと思います。ですから昭和三三年頃から本格的な方針のもとにカードの作成や資料の収集が始まりました。

返還された一四万枚のカードは、その

中で使えるものは使いました。実際にも使っているものもあります。また当時、『井上ポケット辞典』、『井上支那語辞典』というのがありましたね。それから、旺文社から出た『旺文社華日大辞典』、中国では『國語辭典』が出ておりまして、入手できるもので基礎的な資料になる辞典の語彙を全部ばらしてカードに貼り付けるということをしました。それに加え、ピンインの手直しや表現を変えていくというようなことをやりながら、『人民日報』や『新華月報』などの資料から新たに語彙を収集する作業を同時並行的に進めていったのです。愛知大学創立の翌年には、学内に国際問題研究所ができましたので、そこから中国の新聞や雑誌などの印刷物が大量に提供されました。我々はその貴重な資料として語彙収集をやっていたわけです。

この国際問題研究所は国際という名がついていますが、実質は中国問題研究所でした。看板も表は国際問題研究所とありましたが、図書のところは中国図書室、中国図書館というような名前を使ってい

たくらいです。背景を説明しますと、当時中国が朝鮮戦争に介入して、抗美援朝という名目で人民義勇軍を参加させましたよ。当時日本はアメリカに占領されていましたから、日本中国友好協会はアメリカ占領軍からみると、敵対的、敵性的な団体ということで弾圧があったのです。国際問題研究所の中には日本中国友好協会豊橋支部というのが実はできあがっていました。豊橋支部は日中友好協会の全国の支部としては三番目か四番目くらいに早くできたものです。支部長は確か学長の小岩井先生で、中国関係の先生方や中国研究会の学生がかなり会員となっていました。それで中国問題研究所という名前は避けたのでしょうか。

また当時、日中国交回復がされている時期に愛知大学で辞典の刊行が始まるということが、一つの社会的、政治的なニュースとして取り上げられるようになり、追々と学外からもいろいろな形で資料提供などがありました。

そういう中で、我々の中で方針がだんだん出来上がってきました。当時の中国

の辞典は話し言葉を文語調で説明しているのです。ですから日本の国語辞典のような辞典、口頭語の辞典の中国版を作りたいというのが最初にありました。例えば、歴史や古典など古いものはあるけれど、通俗的なものはないんです。サイエンスや社会科学や動植物などの類も極端にない。そういうごく普通の言葉が載っていないことなどを踏まえて、岩波の『広辞苑』のようなもの、その中国語版みたいなものがないかと考えたのです。

中国が社会主義になってきますと、いろいろな出版物に如実に変化が現れてきますよ。新聞も以前は文語調でしたが、現代語の口語体で書かれるようになりました。それから自然科学や科学技術方面の語彙もそうですね。中国ではかつて、すべてをソ連に学ぼうという「向蘇一辺倒」の時期がありました。あの頃大量に、そういった語彙が入ってきました。例えば従来なかったコンバインなどが国営農場で使われるということが記事になりますと、コンバインの中国語訳がで

きますよね。そうするとそれに付随したエンジンや部品などさまざまな機械・技術に関する用語も出てきます。ですから、そういつたことに対応して、幅広くオーラウンドに盛り込もうという方針がだんだん固まってきました。

さらに出典が明らかでない俗語や、文学作品の中の語彙も探ろうということになりました。現代文学は私が担当し、例えば老舎の『四世同堂』や、巴金、魯迅、さらには丁玲や趙樹理など、いろいろな作家の三十数篇の作品から語彙と用例を採用しました。古い方は志村良治氏が担当されました。この方はスタッフを増員した時の一人で、後に東北大学に行かれます。その後、私も中国語教員として教養部に採用されますので、全員が、中国語を教えながらというより編纂の仕事をしていない時が授業だというようなやり方で始めから終わりまでやりました。スタッフについても、しばらくして専任事務職員が一人配属されました。また後に増員して臨時に四、五名の方がこられました。ほとんど全員が同文書院関

係の方々で、卒業後外務省で働いていたり、他大学で中国語を教えていた方々でした。スタッフの充実という点で一番大きかったのは張祿澤先生がメンバーに加わったことです。この方は東亜同文書院大学の中国人講師の奥さんです。台湾に国民政府が移ったときに中国から台湾へ渡り、さらにそこから愛知大学の中国語教員として来日されました。非常に才能豊かな立派な方で、インフォーマントとして大変貴重な存在でした。辞書の用例を作る場合、その最終チェックはいつもこの張先生をお願いしていました。その後、中国人スタッフも増えましたが、初版についてはほとんど全て張先生が目を通されました。張先生はその後、『中日大辞典』の初版が完成してから、ドイツのルール大学に移られました。

■刊行までの紆余曲折

安部 今のお話で、編纂処の雰囲気や編集の方針が徐々に決まっていく様子がよくわかりました。その中で特に、新しい

辞典を刊行するにあたっての編集方針として、従来にないような辞典、日本の国語辞典のような辞典を作りたい、さらにはできるだけオールラウンドなもの、つまり百科項目を取り入れたような性格のものにしたいという考えが、その当初からあったことを伺いして、これはまさに今、『中日大辞典』の大きな特徴となつて生き続けていますし、新版を出す場合にもその理念は変わらないと思います。

また作業的には、限られたスタッフで、授業などの時間的な制約を受けながらも、返還された膨大なカードを整理する一方、大量の新聞や雑誌、さらには文学作品に至るまで、できるだけ広範囲に目配りをして、より多くの新しい語彙を取り入れようとされたわけで、『中日大辞典』刊行にかける先生方の意気込みとご苦労がほんとうによくわかりましたし、辞書編集の大変さを改めて実感しました。当初先生方は、辞書作りに着手してからどのくらいで出版ができるだろうと考えていらつしやつたのでしょうか。今泉 編集委員会の中では最初は五、六

年、永くても一〇年ぐらいだろうと考えており、それ以上長くかかるとは考えていなかったと思います。しかし実際は、先ほど申し上げた基礎的な作業だけで一〇年かかりました。その原因は、一つにはスタッフ数と勤務時間の制約があります。もう一つには、この辞典に現代中国における学術研究の成果を反映させたいという考えがありましたから、どんな新しい成果が出てきてきりがないんですね。中華人民共和国が成立すると、辞書に関わることも矢継ぎ早にいろいろなものが出てきます。例えば、漢字の字体も簡化字が採用されることになり、それに付随したものが出てくるわけですが、それらを全部取り入れようという方針だったのです。私も片端からそういったものを翻訳して編集会議に出しました。それを執筆基準の中に反映させますので、執筆基準も版が変わりまして、結果的に基礎的な作業だけで一〇年かかってしまうことになったのですよ。

ちょうど八年目の一九六三年に、大学の評議会の方から約束が違うじゃないか

という批判が起りました。一〇年くらいで刊行予定だったのが、できそうもないということ、大学財政の逼迫もあって、予算が大きくカットされてしまいました。鈴木、内山、張、今泉は中国語の専任教員でしたが、辞典編纂のためのスタッフの人件費はカットということになりました。それから五、六年後に出版されますから、当初予定の倍かかったことになりましたか。

これは見通しが甘かったこともありましょうし、辞書編集という仕事はやり始めるときりがないこともあると思います。これも結果的なことですが、原稿完成後、印刷会社に持ち込み、初校から始めて再校、三校、四校と戻ってくる。

このサイクルが約一五か月くらいかかるのです。当初は、他のことはあまり考えずに原稿をとにかく完成すればいいということでしたが、校正の段階では同時並行的に最後の頁の原稿を送り込むことになりました。その間、新しい資料が中国側で次から次へと出るわけです。編集者としてはそれを可能な限り取り入れ

たいわけですよ。その例は増訂二版の時に典型的に出ますので、その時にお話ししますが、遅れた理由にはそういった事情もありました。

このような点で辞典の刊行には、本間先生のような経営的なチェックがどうしても必要ですね。我々、作り手の方は次から次へ新しい情報を正確に伝達したいという欲が先に立ちますので、刊行をスケジュール通りやるのがどこかにいつてしまいますから。結果的には大学の厳しい財政状況に、後ろから背を押されたということになったわけですが、我々の方は大変でした。今はもう何十年も前のことになりましたから、余裕をもって言えるのですが、その時は頭にきましてね、我々は辞典編纂処の名前で辞典刊行会を開いて頂いたり、大学の評議会にお願いをしに行ったりしました。

安部 実際に辞書作りに立ち合っておられる先生方からすれば、もちろんよい辞書を作りたいというお気持ちで作っておられたでしょうから、先ほどおっしゃられたように、経営の観点がどうし

でも不足してしまうのはよく理解できません。ただ大学財政が逼迫した状況では、人件費の削減もやむを得なかったのかもしれないませんが、専任以外の編集スタッフを削られ、一方で中国語を教えながら、また一方では辞書編纂にも従事することを求められたわけで、そういう厳しい条件の中で黙々と編集作業を続けられた先生方の、辞書刊行にかける熱い思いと努力が、『中日大辞典』という当時としては画期的な辞典を世に送り出す原動力となったわけですね。

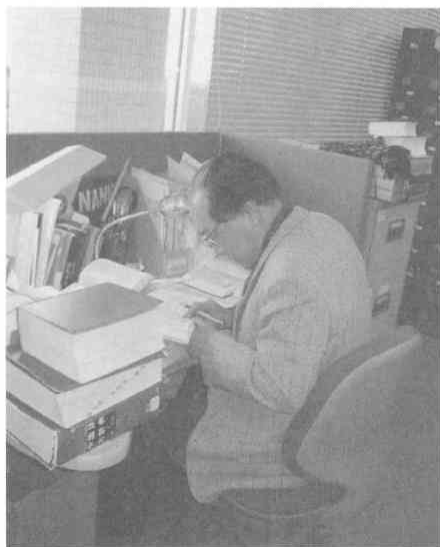
■出版をめぐる人的交流

安部 辞典が出版されるまでには、多くの人々の協力があったと思いますが、中国側との交流と言いますか、中国から関係者をお招きしたり、またこちらからも訪中することがあったようですが、その点についても少しお話しただけませんか、でしょうか。

今泉 辞典編纂処を発足した翌年だったと思いますが、郭沫若中国科学院長を団

長とする中国初の訪日学術代表团が来ることになりました。当時は国交が回復されていませんでしたので、民間ベースで行われたわけです。郭先生が、辞典編纂の起点となるカード返還の恩人だということ、愛知大学にお招きしようということになり、それを友好協会にもお願いしました。しかし、初めての代表团と

いうことで学術面だけでなく、政治的にも注目され、各方面から引つ張りだこでした。東京、北海道、それから郭先生は九州大学が母校でしたから九州へと全国各地へ行かれるのですよ。時間的に豊橋にはとても行けそうにないと、副団長であった馮乃超中山大学副学長がみえることになりました。実は、今愛知大学で中国語の非常勤教員をお願いしている馮愛珠先生のおじさんにあたる方だそうです。またそれがご縁となって、馮乃超氏



一言一句おるそかにできない編集作業

に関する資料をいただきました。馮氏は旧制第八高校、今の名古屋大学で学ばれたので、それで豊橋の方にもまわりましょうということになったのです。そして、豊橋校舎で講演をされたり、辞典編纂処を見学されたりしました。これが、愛知大学にとって最初の国際交流事業となりました。辞典編纂のことがあったから来られたのですが、結果的に愛知大学だけでなく、この地域の日中友好に対する熱意を反映した非常に熱烈な歓迎ぶり

となりました。豊橋駅前で市民の歓迎集
会が開催されましたが、当時新中
国に關してはあらゆることが政治的に見
られていたので、私たちとしては思いが
けない展開でしたね。

馮氏が中国へ帰られてから作成された
報告書は、中国のかなり上層の方々にも
読まれたようです。と言いますのは、
その後例えば卒業生の新聞記者や商社員
が中国に行った時などに、中国側の要人
から愛知大学の名前を知っていると、言わ
れたようで、このような話を聞きますと、
もとはどうもこの辺から来ているように
思いますね。

その後は、日本中国友好協会経由では
なく、中国から直接愛知大学宛てにさま
ざまな文献などが届くようになります。
これも大変有難かったですね。また、我々
の方で編集を進めていく中でわからない
ことが出てくると、中国科学院の語言研
究所宛に質問状を直接送りました。かな
り細かいことも質問するわけです。例
えば、重念と軽声があるでしょう。『中日
大辞典』では、重念と軽声の間にいわば

中程度の軽声があると、強、弱、中くら
いの、そういう三段階のもので表せない
かと考えたわけです。これについてどう
思いますかとかね。この語の積義はどう
でしょうかとか、これは動賓構造と考
えていいでしょうかとかね。細かい問題も
大まかな問題もありまして、とにかく質
問をしようとして送っていました。少なく
も三、四回出しましたが、梨の礫ですね。
今考えてみますと、返事を期待するこ
とは無理ですね。向こうでも決まってい
ない検討中のものもあるのですから。現
在でいえば、『現代漢語詞典』に結果とし
て出てくるような、専門的な細かいこと
まで聞くわけだから、向こうは返事の仕
様がないですよ。ただ、手紙を受け取り
ましたとか、それには答えられないとか
ね、返事が来てもよさそうだとは思いま
したね。そういうことが何もないんです
よ。けれど、中国側の激励や期待は非常
にありがたかったです。

■『中日大辞典』の完成と出版

今泉 そんなことで時間が倍くらいか
かってしまいました。いよいよ刊行と
なるわけです。出来上がってみたら結果
は良しというわけですから、世間から非
常に歓迎されたことは確かです。中日新
聞から中日文化賞を頂きましたし、編集
途中に文部省からも多額の科研費がおり
ました。当時文部省の科研費というのは、
人文関係、社会科学関係にはなかなか百
万という単位ではつかなかったよう
です。要するに機械を買わないと大きなお
金がつかなかった。当時、まだ現在のよ
うなコピー機がなかった。青焼印刷
でやっていましたから、当時の文献は今
はもうほとんど字が消えています。そこ
でカード作成上の必要から、エレファッ
クスといったと思うのですが、島津製作
所製の大形印刷機の購入を申請したら通
りました。そういう高額の科研費申請が
認められるのは、当時の愛知大学として
は画期的でした。刊行については、紆余

曲折を経ましたが、結局大学の自費出版となり、本間先生の発案された刊行会がフル活動して、さまざまなところから支援をいただきました。

また、辞典を予約販売することによって印刷費を捻出する方法を本間先生が編み出され、さらに大口購入の場合、たぶん十部以上ではなかったかと思いますが、お買い上げいただいた辞典の半数に、その方の名前をつけて中国側に贈呈するという方式をとろうということになったのです。そもそもこの辞典は日中友好の精神でできたから、それを実現するため中国側に贈呈し、中国の対日関係機関や大学などで役立ててもらいたいという思いがあったのです。当時日中貿易は大手商社が動けなかつたので、いわゆる友好商社みたいなところがやっています。そういった商社が一〇冊、二〇冊と購入してくれたり、中日、朝日、毎日、読売などの新聞各社や放送局、その他の大企業などが、例えば一〇〇冊買うと五〇冊を中国へ贈呈するわけです。ある意味で、購入側にとってもありがたいで

すよね。とにかく一〇〇冊買えば、五〇冊に自分の名前をつけて中国で宣伝できるわけですから。これが当りましてね。それから特別の大口寄付がありました。

結果的に印刷費の二分の一強ですが、一八〇〇万のうち一〇〇〇万じやなかつたかと思うのですが、外部からの寄付が集り、大学の方ではその不足分を出しましょうということになりました。ひとえに本間先生の働きによるものだと思います。

印刷の状況を説明しますと、当時中国では簡化字が制定されたばかりでした。その頃の印刷は、もちろんコンピュータではなく、活版印刷と呼ばれるもので、まず鉛の母型を作り、それを文選工が頁ごとに組んでガチャンと印刷するので、そうすると、簡化字についても、そのもとになる活字の母型を作らなければいけないでしょう。あれはコストがかなり高いのです。職人が和紙に掌くらゐの大きさに字体を書き、それを写真に撮って、機械で彫って作るわけですから。これは全部で六、七〇〇字もあつたと思

いますが、とても全部は作れないのですよ。ちょうどその時、図書印刷株式会社、清水の舞台から飛び降りるつもりでしょう、日中友好のために大サーブスしましょうといつて、活字の作製費を自己負担していただくことになり、当然最低の入札額だったのですよ。そこで印刷を図書印刷にお願いしたのです。しかし、偏旁簡化字をいれると七〇〇〇字になつてしまい、そこまではとても無理なので、例えば、「書」という字を四画の字の「書」にするような単体の簡化字二二三八字だけを作るようになりました。また中国語としては使うが、日本語としては使われない字もあるのですが、それらについても図書印刷がその全額を負担してくれました。

次に販売についてですが、これは同文書院の卒業生が経営していた大安という会社に依託しました。大安は、戦後中華人民共和国で出版された書籍の輸入販売を行っていた本屋です。版元、出版社ではないのですが、大手の出版社がいろいろな経緯があつて出版を引き受けてくれ

ず、結局愛知大学の自費出版という形をとり、大安が総発売元で刊行されたのです。辞典の方はお陰で評判は良かったのですが、なにぶん取次店を通して各地の本屋に卸すことができないのです。本の流通機構はかなりしつかりしていますから、大安の店頭販売と通信販売しかできず、後に大学生協に直接卸すことができた程度で、地方の大きな書店の店頭には並べられないのですよ。愛知大学の評議会も、初めは辞典ができるかどうかかわからない、次にはできたけれど資金回収の

目途のない辞典に印刷費をそんなに出せない、さらには売れるかどうかかわからない、といっていたら非常に評判をとってかなり売れるようになる、今度はもっと売れるようにしなさいと強く求めてくるようになったのです。具体的にいうと、大手の出版社に替えなさいということですが、これは、それまでの経過から考えると、言うは易く行いは難しでした。そして最終的に『中日大辞典』の初版が六七年の末に完成し、六八年に出版されます。それから約二〇年後に増訂版を出します

が、それを期に初めて大手出版社による出版に変わります。ただし、依然として愛知大学の自費による刊行物という扱いは現在でも変わっていません。

■出版の反響と編纂処の解散

安部 今お話にありましたように、『中日大辞典』は、一九六八年二月に正式に出版されるわけですが、出版までに日中兩國の実にさまざまな多くの人々の協力や援助があったことを、私を含め新しく辞典の編纂に携わるようになった者は、決して忘れてはいけないと思います。また、今泉先生が何度も指摘されておられるように、辞典の刊行に本間先生の斬新な発想と優れた経営手腕が不可欠であったということもよくわかりました。こうして出版された『中日大辞典』ですが、初刷りは一万冊、人々の期待もあって、なかなか好評だったようですが、当時の反響と、『中日大辞典』が出版されたことによつて、一応当初の目標は達成されたわけ、その後中日大辞典編纂処はどう

なったのか、その後の経緯についてお伺いしたいのですが。

今泉 辞典は幸い好評で、もう亡くなられた橋本萬太郎氏が執筆された三省堂『言語学大辞典』の中国語の項の中で、日本で唯一この『中日大辞典』が取り上げられ評価されています。要するに紙とはさみと糊で切り貼りしただけのものではないということですが、事実そういう辞書まがいのものもあるわけですが、そういうものではないということが世間で評価されたと思います。

こうして評価も定まったのですが、編集を始めてからとにかく十何年もたち、私個人としてもやはり疲れましたね。実際、鈴木先生はその後に大病にかかり、もつとシヨックなことには内山先生が数年後お亡くなりになられるのです。これは辞書を一冊作ると目が潰れたり死んだりするといわれるように、やはり大変な苦勞なのですね。他方、大学の方も財政上は不要な支出が減る方がいいわけですから、辞典編纂について今後どうするかという抜本的な検討が我々三名に委ねら



れた格好になりました。

具体的に言いますと、辞典編纂処には自前の事務室もありましたし、図書資料等が一万数千点ありました。それ以外にも、什器備品の類や万余のゲラ刷り、二〇万枚の辞書カードとカードボックス等の物品も相当あり、これを維持管理する

のにどうするかという問題があるわけです。また校正がいかに大切かということが後々わかるのですが、年を追って何万冊と出版されるわけで、何万人の方がこれを利用されるわけですね。そうしますと、四校まで校正したとはいっても、やはり誤植がたくさん出てくるのです。

これにどう対応するかという問題もあつたわけですが、我々三人が集って話し合いをした結果、完成してほつとしていたためか、その後の見通しをあまり考えず、解散しようということになってしまったのです。六九年くらいでしょうか。辞典編纂処がなくなつて、じゃあ何が残つたかというところ、辞典刊行会が残つたのです。組織上は辞典刊行会を残して、辞典編纂にかかわる資料等は、三人の研究室に置いておくことになりました。この当時、それぞれに研究室が与えられていたのですが、まずそこに保管しておき、次の増刷時にはまた集つて、どうしたらいいか検討しようということになりました。図書は大学図書館に寄贈し、什器備品もそれぞれの部署にもらつてもらいました。辞

典編纂を事業として継続する場合、一旦編纂処を解散することがいかに致命的かということに、後になって気付かされることになりました。

というのは、六八年の完成後、中国側に寄贈するという形で二、三〇〇〇冊をそれぞれ買い上げていただいた方々の名前で送りましたので、是非中国側の反応も知りたいということと、中国との交流を愛知大学としても行いたいということ、郭沫若氏に訪中をお願いしたので、これが一九七一年のことです。中国は六六年に文化大革命が始まりましたが、こちらとしては文化大革命なんていうことは予想せずに作つて、原稿は一九六四年くらいで収集が終わつていました。印刷には一五か月かかりましたから、刊行の一五か月前には原稿が基本的には完成していたはずですが、ところが一九六六年頃から、文化大革命関係のものがぼつぼつ出始め、その後、新しい語彙がどんどん出てくる。そして売り出した途端に文化大革命でしょう。これをなんとかしたいという欲求が出てきて、訪

中したいという申請を出したのですけれど、とてもそんな時期ではないと、実現は日中の国交が回復された翌年の一九七三年になってしまいました。

それで訪中がいよいよ実現するわけでは。愛知大学の名前で訪中した代表团としては、この辞典編纂のために行った学術代表团が最初です。一九五五年に馮乃超氏が来られ、それから約二〇年後に愛知大学側がそれに応えて行ったことになります。代表团は鈴木先生が団長で、私も団員の一人として参加しましたが、内山先生は参加されませんでした。

我々は南開大学、北京大学、復旦大学の三大学で学術交流をしました。南開大学がホスト校となり二日間にわたって学術交流を行いました。南開大学の言語、文学、歴史、哲学などの教授が座談会に参加してください、『中日大辞典』についてそれぞれ具体的に何頁の何はどうかという具合に逐一指摘していただきまし

ていますから、文化大革命に関する語彙はその都度追加という形で入れていったので、そのため体系的に入らなかつたということもあります。

さらに言えば、文化大革命についてはいろいろな見方がありますけれど、日本で受け入れられたのがどちらかというと中国側に好意的な理解だったのでしょう。例えば、『五七幹校』は、我々の辞典でもそうですが、強制收容所という解釈ではなかつたですよ。やはり幹部再教育の施設という解釈です。そういう面もなかつたわけではないですけどね。こういった実態についても見聞を深めることになりました。

■編纂処の再開と改訂作業

今泉 中国へ行つて、いろいろなことを直に目にし、また辞典の簡体字はまだ不完全で、残りの何千字というのは簡化字ではないわけですから、これもちゃんとしたいという思いがあつて、帰国後再び三人で集つたのですが、その時鈴木先生

から増訂版を作ること、中日大辞典編纂処を再開したいという提案がされたのです。一旦解消したものをもう一回構築することの大変さを私は当時十分にはわかつていなかったのですが、結果的に内山先生は参加を断られました。内山先生は翌年亡くなられますから、お体の調子が悪かつたこともあつたのでしょう。鈴木先生は、自分一人でもやる覚悟であり、その頃病気で手術されたこともあつて、専任教員を退職してやるとおっしゃいました。そうなると残っているのは私だけです。それから、私も、じゃあやりましょうということになって、初版時の内山先生の役割、つまりマネージャー的な役割を担うことになりました。こうして『中日大辞典』の増訂版の編纂が始まります。

増訂版は初版の手直しという形で始まりました。しかし、この間に文化大革命が終わり、その後八〇年代、九〇年代になると改革開放ということで、今度は資本主義——市場経済の社会に変わりますよ。そうなりますと語彙も当然のことながら変わってきますし、何よりもさま

さまざまな言語面での政策が進み、辞書編纂においてどうしても取り入れなければいけないような事柄が多々でてきます。そういうことで増訂版をどうしても作らざるを得ないような状況も客観的にみてもありました。もう一つ財政的なことで言いますと、華日辞典刊行会はずっと継続されていまして、そこから提出される収支表を見ると、だんだん赤字になっていくわけですね。結果的には大学の付属事業として唯一、税金を納める、つまり利益が出てしまうくらいの収支になるわけです。七二年以降、日中の全面国交回復を期に、交流が全面的に広がるという背景のもと、中国語の学習人口が増え、また光生館や岩波書店などから中日辞典あるいは日中辞典が出てくる状況でした。これらが要因となつて、どうしても増訂版を出さなければという気運が高まってくるわけです。

正式に出版される以前の版が日本では公然と市販されていて入手できましたので、これとの比較対照ができました。これをベースにしたさまざまな資料も出てきました。中国国内の状況の大きな変化とも関係があります。

それから『中日大辞典』の初版との比較で言いますと、すでにこの頃は「中ソ一辺倒」から「中ソ論争」になって、四、五〇年代製だったソ連式の機器は第一線から退き、新しく日本やアメリカの機械や新しいテクノロジを反映したものがどんどん入ってきます。そういう点で、初版に取り入れた新語が古色蒼然とした感じにどうしても見えるのです。そのようなことで、増訂版の編集は客観的に見ても、また我々の側から見ても、どうしてもその必要があつたのだと思います。

鈴木先生が編集主任でしたが、お体のこともあり週に二、三日程度の出勤でした。その他のメンバーは私が編集委員長、辞典編纂のために後にお願いしました中国人の黄異先生。それから内山先生が亡くなられたあと、陶山信男先生がみえま

した。その他、現在おられる荒川清秀先生や転出された森博達先生など、中国語の先生方全員に編集委員になっていただきました。安部先生にも編集委員をお願いするのですが、それは増訂版が完成しからのことでした。またこの時は編集協力委員を作りませんでした。というのは中国で『中国大百科全書』などさまざまな権威ある資料が出てきて、これを活用すれば十分足りる状況になったからです。編集委員が新語を入れ、誤りを正し、古いものを取るといふような形で進めました。結果的に一九八六年二月に完成します。これも一三年か一四年の編集時期を要したわけですので、初版の一三年とほぼ同じ年月がかかったこととなります。

■増訂版と増訂第二版の出版

安部 初版の完成後、一度は解散した辞典編纂処が、一九七三年の訪中を契機として多少の紆余曲折を経て、一九七五年に再び開設され、そこから増訂版の出版

へ向けて本格的に動き出した。鈴木先生が退職され、編集の主任を務められ、今泉先生が編集委員長という、新しい体制ができたわけですね。増訂版の完成までには、初版の時とほぼ同じ時間がかかったわけですが、完成までの道のりは決して平坦なものではなく、その間まいたいくつかの困難を乗り越えることになりましたね。その中の最大のものはおそらく、今泉先生が「増訂に際して」の中でも書かれておられるように、増訂版の出版に情熱を傾けておられた鈴木先生が、まさに「青天の霹靂」で、八二年に急逝されたことだろうと思います。その後は今泉先生を中心に編集作業を進め、八六年に完成したわけですが、増訂版の特徴やその評価についてお聞かせ下さい。

今泉 この増訂版は、致命的というのではないのですけれど、ある意味では非常に無様なことをやりました。増訂版には簡化字総表に載る簡化字を全て入れました。印刷通用漢字字形表というのが中国で出ていて、この七〇〇〇字近くを全部取り込んで作りました。日本の辞書の中

で唯一中国の漢字に関する決定を完全に反映したものだという自負があったのですが、実は増訂版が出来上がった翌年になんか数ですが、簡化漢字の追加が出たのです。わずか七字ですが、初版のほぼ倍の頁数にあたる二五〇〇頁中のどこかに入っているこの七字を百パーセント正確に捕捉することはできません。その後さらに五三個の漢字の発音も訂正されたので、合計六〇字です。六〇個の漢字の字形をすべて網羅して修正したいと、増訂版の増刷の時に見直しをとつたら、通常の印刷費用よりかなり高くなることがわかりました。改版すれば完璧なので、これを評議会にお願いしたのですが、手続き上の瑕疵を指摘されまして、一年待たがかりました。結局、翌年改訂版が出されるわけですが、大学にも大変迷惑をかけました。これらの訂正を加えましたので、増訂版は一刷だけで終わりで、翌年六〇字を取り入れた増訂第二版を出版し、現在に至っているわけです。

これも非常に売れ行きが良かったので、これは初版の成果の上に立ったとい

うことと、出版社を今度は大手の大修館書店にしたことが大きかったと思います。大修館書店は『大漢和辞典』を出したところですよ。大手出版社ですから全国の書店の店頭で中日大辞典が並び、初版出版時に大学当局から期待されながら実現できなかった、愛知大学の知名度を全国的にするということを実現できたわけです。この増訂第二版は、初版の性格



2度の大改訂を含めて版を重ねる「中日大辞典」

をそのままにしたので、全体の語彙数は相当数増えましたし、新しい語彙も三万語ほど増やしたので、その点では充実したものになったと思います。ただ、初版では新中国になってからの作家の作品を取り入れたので、今回も新時期文学などからの語彙や用例の収集を予定していたのですが、あまり実現できませんでした。それからもう一つ、古い語彙をカットせざるを得ず、その点においては比較的古いところをやっておられる方々からは、初版の特徴の一つがなくなつたというところで不満が出たりしました。また、中国語学習者が飛躍的に増えたので、学習者向けの辞書という期待もあつて、そういった点も盛り込んだこともあり、結果的にかなり分量が増えました。逆に言うと、両者の折衷で特徴がやや曖昧になつたという点もないわけではないと思いません。

しかし、この増訂第二版は、初版に劣らぬ売れ行きでした。一方で、中国語学習者や中国語を必要とする人たちの層がさらに飛躍的に伸びましたので、そう

いった需要に百パーセント応えるわけにはいかないという状況もあります。文化大革命が終わり、八、九〇年代以降中国はあらゆる点で大きく変わっていますよね。近代国家になつたというのは変ですけど。例えば、今度の新型肺炎などでもこれに関連したウィルスなど、要するに近代科学の用語を、今中国では日本などと同時並行的に取り入れていきますよね。そういう事例が急速に増えたので、テクノロジー関係などの語彙については、今の増訂第二版は不足していると思います。現在、売上げが当初の半分ぐらいに減つていることも、その一つの反映であろうと思います。もちろんこの間、多種多様な中日辞典や日中辞典が出版されたことの影響もあると思います。

いずれにしても、そのような状況下で平成一四年一〇月に中日大辞典編纂所を豊橋校舎から名古屋校舎に移転し、第三版の編纂が開始しました。これは愛知大学が八年前に中国関係の特化と名古屋校舎への集中化ということで現代中国学部を設立し、それを背景に辞典編纂所も名

古屋校舎に移転したものです。こうして、新しい体制のもとに第三版の編纂が始まつたということになると思います。

■第三版の出版に向けて

安部 八六年に増訂版が出版され、翌年の八七年には増訂第二版がまたすぐ出版されるわけですが、この間の事情は、先生が書かれた「増訂版の補訂に当って」でも簡単に触れられてはいるのですが、事情を知らない方にも、今のお話でなぜ増訂第二版を出さざるを得なかつたかということがよく理解できたのではないかと思います。こうして出版された増訂第二版も好評で、初版に劣らぬ売れ行きを見せたようですが、その増訂第二版も出版からすでに一五年以上の年月が経ち、時代の変化や要求に対応できなくなつてきており、第三版の出版が強く求められるようになりました。こうしたニーズにあわせて、また辞典編纂所の移転とそれに伴つた新体制への改組などを経て、これまで少しずつ準備を進めてきた新版出

版のための編集作業を本格化させ、愛知大学の戦略的事業項目のひとつとして、第三版の刊行に全力を注ぐことになったわけです。新体制では、中日大辞典編纂所の所長および編集委員長は私が務めさせていただくことになり、先生には編集主幹として引き続き第三版の編集に携わっていただくことになっております。編集主幹のお立場から、第三版出版に向けての抱負をお話しいただければと思います。

今泉 第三版は新しく成立した中日大辞典編纂所での編集となります。編纂所の新体制は安部先生が所長で、現代中国語部の教員を始めとして、名古屋、豊橋両校舎の中国語教員あるいは中国関係の各分野の教員が所員となり、スタッフは飛躍的に増強されたと思います。また編集も、初版の時の編集形態に戻り、中国語専任の先生方が編集委員、それから中国関係各分野の先生方が編集協力委員という体制で行います。

内容的には先ほど言ったような点が主となりますが、ボリュームを増やすこと

なくいかに充実させるかということなると思っています。第三版は当然初版、増訂版、増訂第二版と続いた基本的な性格をさらに徹底することになると思います。

それから中国ではその後もさらに辞書編集に関するいくつかの政策的な決定がなされています。例えば、漢字の部首の部数をつくつにするとか、どういう形の部首を残すとか、あるいは辞典の約物といましようか、記号類、符号類ですね、こういう場合にはこういう矢印を使うとか、そこまで中国は次々に決めてきています。『現代漢語詞典』の二〇〇二年版はそれに従って編集されています。こういったものを第三版に取り入れるかどうかは、最終的に編集委員会で決定されておりませんが、中国でいうところの現代漢語をできるだけ正確に反映させた辞典にするという基本の考え方は変わりません。例えば香港や台湾の語彙は港台という括り方で方言として入れることも考えております。いずれにしても、従来の基本的な性格を生かして現代の需要に合わせるという点では、愛知大学の『中日大

辞典』として一貫させたいと思います。

それから増訂版が出た過程でCD-R OMなど、電子版の話もありましたが、これについては編纂委員会が一定の方針が立てられるだろうと思います。私の今の仕事は、『中日大辞典』第三版の編集を責任もってやることですし、残された時間も多くはないので、できる限りこれに集中したいと思います。

『中日大辞典』は、初版以来多くの利用者の支持があつて今日まで存在していますが、とりわけ今度の第三版の出版に関しては、非常に熱心に支えてくれる東亜同文書院や愛知大学の卒業生の方々がおられます。特に松山昭治氏は、『中日大辞典』所収の語彙が、人民日報などでどのように使われているかという情報を、長年にわたり多くのカードにして送って下さっています。その他いろいろな方々の協力もありますので、現在の需要に込えられる新しい第三版をできるだけ早く完成させたいと思っています。『中日大辞典』の編集は、愛知大学創立一〇周年記念事業として始まりまし、節目とい

うことでは、第三版の出版が六〇周年記念に間に合えば、これは願ってもないことだと思えます。ただ、それは大変厳しいですけどもね。

安部 私自身、外大の中国語科に入学したのが七四年で、その時に購入したのが『中日大辞典』の初版本だったのをよく覚えています。それ以来の愛用者ですし、この辞書の恩恵を大いに被った一人です。今は逆に、それを出版する側に身を置くことになったのも、きつと「有縁分」（縁がある）からなのだろうと思えます。前増訂第二版の出版には参加できませんでしたが、今回は第三版の出版に向け、これまで鈴木先生や今泉先生がやってこられた仕事とその思いを引き継ぎ、微力ではありますが鋭意努力したいと思います。第三版を、従来の特徴は残しつつも可能な限り現在のニーズに合わせたより充実したものにし、これまでこの『中日大辞典』を利用してくださった多くの方々や、第三版の出版を心待ちにしておられる方々のためにも、一日も早く出版したいと考えております。

本日は長時間にわたり、『中日大辞典』に纏わるさまざまなお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございました。

(二〇〇三年六月二日)